

職員オススメ本 9月



「凍る草原に鐘は鳴る」 天城 光琴／著 文藝春秋

草原に額を立てて行かう、遊牧民族アゴールに伝わる伝統芸能「生き絵」。念願だった演出の「生き絵師」になったマーラだったが、その矢先動くものが見えなくなるという災厄が一带を襲う。族長から生き絵を行うことを拒まれ、家族で隣国に移ることとなったマーラは、その資金を得るために訪れた稲城で、宮廷を追われた奇術師の奇蹟と出会う。

架空の国アゴールを舞台にした第29回松本清張賞を受賞したファンタジーです。



「百年厨房」 村崎 なぎこ／著 小学館

石庭大輔は、宇都宮市大谷町の旧家の当主である。約三百坪の広大な庭に大谷石の蔵が五棟点在し、大正時代に建てられた家に一人暮らしをしている。ある日、石庭家の蔵に興味がある友人、学芸員の篠原紫が来ている時、甲高い悲鳴が響いた。駆けつけると、日本髪で着物に下駄姿の女性が転がり落ちてくる。女性は、石庭家の女中でアヤと名乗り、今日は大正十二年九月一日だという。その日は、関東大震災発生日でアヤは地震の衝撃で階段から転がり、タイムスリップしたのだと紫が騒ぐのであった。

大正時代の食文化が時を超えて家族の絆を結びつけるファンタジー小説です。



「毎日ザレゴト」 ナジャ・グランディーバ／著 大和書房

テレビでよく見かけるナジャ・グランディーバさん。物言いがおっとりとした女装家で、コメンテーターとしても数多く活躍しています。

『心は男でも女でもなくあえて言うならば、ナジャ』『だいたい60%ぐらいのテンションで、他愛もないことで笑って楽しく生きていけたらじゅうぶん』『人にいじわるする人は、人生にいじわるされるんじゃないかな』

そんなスタンスで生きているナジャさんがお茶飲み話感覚で読んでもらえたらと話しているエッセイ。様々な名言に、心がフツと軽くなるかもしれません。